

2023年11月17日(金) 18日(土) 19日(日)

November 17th, 18th, 19th, 2023

笹川平和財団 国際会議場

International Conference Hall,
the Sasakawa Peace Foundation

最終報告書

国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ

International Eelgrass and Blue Carbon Workshop

Amamo2023

with J-COAST

(c) Ayane

主催：国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ実行委員会（COAST Card Japan、海辺つくり研究会、金沢八景－東京湾アマモ場再生会議、共存の森ネットワーク、ジャパンブルーエコノミー技術研究組合、セブン-イレブン記念財団、笹川平和財団海洋政策研究所）

Sponsorship：International Eelgrass and Blue Carbon Workshop Organizing Committee（COAST Card Japan, Association for Shore Environment Creation, Amamo Rivival Collaboration in Kanazawa-Hakkei, Tokyo Bay Area, Network for Coexistence with Nature, Japan Blue Economy Association, Seven-Eleven Foundation, Ocean Policy Research Institute of the Sasakawa Peace Foundation）

ご協賛

企業・団体

Sponsorship

Companies

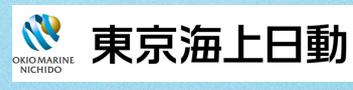
Organizations



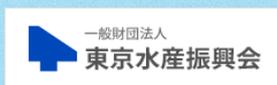
一般財団法人
セブン-イレブン
記念財団
Seven-Eleven Foundation



日本テレビ放送網株式会社
Nippon Television Network Corporation



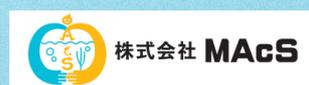
東京海上日動
Tokio Marine & Nichido Fire Insurance Co., Ltd.



一般財団法人
東京水産振興会
Tokyo Fisheries Promotion Foundation



公益財団法人国際エメックスセンター
International EMECS Center



株式会社MAcS
Marine Activity Supports Co., Ltd.



非営利特定活動法人海辺つくり研究会
Association for Shore Environment Creation

国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ プログラム

(総合司会) 佐伯桃子
* 敬称略

17日 (金) 15時00分～18時00分 世界と日本のブルーカーボン研究の最前線

★ 15:00-17:00 基調講演

- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| BC生態系の保全に関する国際的・学術的潮流 | ▷ カルロス・デュアルテ (KAUST) |
| 東アジア海域におけるBC事業の展開・展望 | ▷ エイミー・ゴンザレス (PEMSEA) |
| ブルーカーボンの研究、政策、社会実装の動向 | ▷ 桑江朝比呂 (港空研、JBE) |
| ブルーカーボンを基軸としたブルーエコノミーへの展開 | ▷ 渡邊敦 (SPF海洋政策研究所) |

★ 17:00-17:50 パネル討論：世界の現状と本シンポジウムに期待すること (モデレータ：堀正和)

18:00-19:30 交流会 (一般は当日受付で先着順)

18日 (土) 9時30分～17時00分 アマモ場再生の担い手たち

★ 9:30-11:15 基調講演

- | | |
|---------------------------------|----------------------|
| 日本における藻場生態系のブルーカーボン定量評価の実践 | ▷ 堀正和 (水研機構) |
| 日本における環境DNAを利用した生物多様性観測網ANEMONE | ▷ 近藤倫生 (東北大) |
| 地域におけるBC生態系の保全・再生 | ▷ ヤスミン・ティロル (ア克蘭州立大) |
| 地球温暖化への生物適応：紅海を例として | ▷ スザーナ・アグスティ (KAUST) |

★ 11:30-13:00 セッション1：実践の最前線1 漁業者・企業の関わり (モデレータ：小林正典)

- | | | |
|--------------------------|-----------------|----------------------|
| ▷ 川畑友和 (JF全国漁青連) | ▷ 天倉辰己 (日生町漁協) | |
| ▷ 塩田肇 (金沢八景-東京湾アマモ場再生会議) | | |
| ▷ 伊勢勉 (関東地方整備局) | ▷ 志村遥夏 (マルハニチロ) | ▷ 森永仁 (セブン-イレブン記念財団) |
| ▷ 竹内聖一 (たてやま・海辺の鑑定団) | | |

★ 14:10-15:30 セッション2：実践の最前線2 市民・若者の関わり (モデレータ：港絢子)

- | | |
|--------------|------------------|
| ▷ 阪南市立西鳥取小学校 | |
| ▷ 岡山学芸館高等学校 | ▷ 福岡工業大学附属城東高等学校 |
| ▷ 熊本県立芦北高等学校 | ▷ 関西大学北陽高等学校 |

★ 15:50-17:00 セッション3：実践の最前線3 科学コミュニケーション (モデレータ：榎太一)

- | | |
|-------------------|--------------------------------------|
| ▷ 大神弘太郎 (ふくおかFUN) | ▷ 田村聖花 (東京海洋大) |
| ▷ 瀬之上綾音 (都内小学生) | ▷ シドニー・アンダーソン (COAST Card科学コミュニケーター) |

★ 17:00-17:15 まとめ

- ▷ Amamo2023事務局

19日 (日) 9時30分～16時00分 社会変革を目指して

★ 9:30-10:40 基調講演

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 沿岸生態系の保全戦略 | ▷ 灘岡和夫 (東工大) |
| 持続可能な沿岸域の構築に向けた社会変革 | ▷ ウィリアム・デニソン (メリーランド大) |

★ 11:00-12:20 セッション4：実践の最前線4 各国での実践 (モデレータ：川辺みどり)

社会変革のための多様な関係者の参画

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| ▷ 米国・チェサピーク湾 (米国チーム) | ▷ フィリピン・マニラ湾 (フィリピンチーム) |
| ▷ インド・ゴア海岸 (インドチーム) | ▷ 日本・東京湾 (日本チーム) |

★ 12:20-12:30 まとめ「これからの沿岸域管理、アマモ場・BC生態系の保全・再生に向けて

- ▷ Amamo2023実行委員会

★ 13:30-15:30 ワークショップ：世界との対話『社会変革を目指して』

講演者、参加者がグループ毎に円卓に集まり、参加型のゲームやテーマ別の議論を行います。

★ 15:30-16:00 まとめ・閉会：これからの沿岸域管理、アマモ場・BC生態系の保全・再生に向けて

(発表者、タイトルなどは変更になる場合があります。)

国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ（Amamo2023）と COAST Card 国際ワークショップ（J-COAST）の振り返りとお礼

2023年11月17日ー18日、笹川平和財団国際会議場において開催された国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ（Amamo2023） / COAST Card 国際ワークショップ（J-COAST）にご登壇、ご協賛、事前登録、当日ご参加、ご視聴いただきました皆さま、本会合が成功裏に開催できましたこと、皆さまのご協力、ご参加、ご支援の賜物であり、心よりお礼申し上げます。

3日間の会期を通して、会場参加は延べ約500人、オンライン参加は日本サイトに延べ1,900回、海外サイトに延べ500回の視聴がありました。現在、アーカイブ動画がご覧いただけるようになっており、2024年5月現在、通算の視聴数は1,400回を数えております。

3日間の基調講演・セッションを通して、幅広い見地から、ブルーカーボン生態系の保全・再生に向けた考え方、実践事例、これからの方向性が提示・議論されました。その結果は、Amamo2023宣言として、これからの5-10年のアマモ場・ブルーカーボン生態系の保全・再生の方向性を示す、喫緊の行動指針として参加者一同の賛意を得てとりまとめられました。

今、Amamo2023宣言に示された方針・配慮事項・必要な要素を将来に向けた共通のビジョンとして、我々自身が主体的に活動することを誓います。同時に、幅広い関係者への啓発・働きかけを通して、有効な社会環境ネットワークを構築し、環境の動的なシステムの理解を進め、環境の評価を行いながら順応的に社会変革のための行動を起こすきっかけとなることを強く祈念いたします。

Amamo2023 実行委員会 事務局・古川恵太

目 次

1.	開催結果報告	1
2.	Amamo2023 宣言	2
3.	会場風景	4
4.	発表抄録（3日間の発表概要）	8
5.	News Letter（東京湾、石垣島・石西礁湖見学会報告）	14
6.	協賛企業広告	20

本資料は、国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ（Amamo2023）とCOAST Card 国際ワークショップ（J-COAST）の開催記録のために取りまとめられたものであります。全文または一部の無断転記、転載を禁じます。

Amamo2023/J-COAST の各種資料は、<https://amamo2023.com/> において公開しております。また、各発表の映像アーカイブは、以下の SPF Youtube チャンネルより公開されております。

各プログラムの Youtube チャンネル（spfnews）へのリンク

日にち／プログラム	日本語	英語 (English)
11月17日 開会・基調講演・パネル討論	https://youtu.be/4uzEhy6grEA	https://youtu.be/Pt2cB3WId-E
11月18日 基調講演・セッション1	https://youtu.be/5krGOR-TWVM	https://youtu.be/ja4p2H7xMY0
11月18日 セッション2・3	https://youtu.be/YjHUJJjYrDk	https://youtu.be/a_agO5B29q4
11月19日 基調講演・セッション4・閉会	https://youtu.be/z23i5fQIOMk	https://youtu.be/xDfikgmiFis

spfnews は、公益財団法人笹川平和財団（SPF）の公式 YouTube チャンネルです。



国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ（Amamo2023）
COAST Card 国際ワークショップ（J-COAST）開催報告



- 会議名：国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ（Amamo2023）
COAST Card 国際ワークショップ（J-COAST）
- 会 期：2023年11月17日（金）15:00-18:00 ブルーカーボン研究の最前線
11月18日（土）9:30-17:00 アマモ場再生の担い手たち
11月19日（日）9:30-16:00 社会変革を目指して
11月20日（月）～21日（火）東京湾見学会
11月22日（水）～24日（金）石垣島・石西礁湖見学会
- 会 場：笹川平和財団国際会議場（東京都港区虎ノ門）
- 見学場所：東京湾：WATERS 竹芝（竹芝干潟）、浜離宮恩賜庭園、お台場海浜公園、
心なばし三番瀬環境学習館、大田区 海苔のふるさと館
石垣島：国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター、バナナ公園展望台、
白保海岸、名蔵アンパル、大浜地区、吹通川、玉取崎展望台
石西礁湖：竹富島南、竹富島北、大崎地先
- 共 催：国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ実行委員会
（COAST Card Japan、海辺づくり研究会、共存の森ネットワーク、
ジャパンプルーエコノミー技術研究組合、
公財）笹川平和財団海洋政策研究所、（一財）セブン-イレブン記念財団）
- 協 賛：（一財）セブン-イレブン記念財団、日本テレビ放送網株式会社、
東京海上日動火災保険株式会社、（一財）東京水産振興会、
公財）国際エメックスセンター、海辺づくり研究会、株式会社 MAcS
- 来場者数：会場：500名/3日間、オンライン：2,400名/3日間
アーカイブ視聴累計：1,400名（会議終了後～2024年5月現在）
- 発 表：全体：基調講演10題、セッション発表20件：1日目（ブルーカーボン研
究の最前線：基調講演4題、パネル討論）、2日目（アマモ場再生の担い手た
ち：基調講演4題、セッション1：漁業者・企業から6件、セッション2：
市民・若者から5件、セッション3：科学コミュニケーションとして5件、
まとめ）、3日目（社会変革を目指して、基調講演2題、セッション4：各国
での実践として4件、Amamo2023宣言のまとめ、参加型ワークショッ
プ）
- 展 示：海辺の自然再生高校生サミット参加校の展示、COAST Card プロジェクト
紹介、全国アマモサミットの歴史、協賛企業・団体からのバナー展示
- 取 材：新聞社・テレビ局など8社

Amamo2023 宣言

2023年11月17-19日、アマモ場を含む、ブルーカーボン生態系の保全・再生のために活動する多様な関係者が、国内・国外から東京に集まり情報交換を行いました。その中で、ブルーカーボン生態系の保全・再生のための指針や方針、具体の活動の情報交換がなされるとともに、今後の社会変革に向けた取り組み方が議論されました。

その結果として、我々の地球環境・海洋環境は地球温暖化による気候変動と、自然生態系の劣化の影響による生物多様性の損失の危機に面しており、今、行動を起こすことが必要です。我々は、以下のような行動の指針に基づき、自分たちのできる最善を尽くして行動していくことを宣言します。

対処方針) 気候変動と生物多様性の損失のどちらにもバランスよく対処することが必要です。そのためには、1) 科学的調査・知識をベースに、多面的な取り組みを行うことにより、ブルーカーボン生態系をブルー自然資産 (Blue Natural Capital) と捉え、2) 自然に配慮した対応 (Nature Based Solution) やブルーカーボン・クレジットやマーケットを用いて行動を進め、3) ブルーエコノミーの進展につながるような取り組みを進めることが大切です。

配慮事項) その取り組みは、多様な関係者との連携で進めることが必要です。その際に、1) SDGs やパリ協定、昆明-モントリオール宣言、ラムサール条約に示される湿地保全や賢明な利用のような国際的 (Global) な目標や行動規範と地域 (Local) の価値創出の整合性を意識し、2) すべてのステークホルダーとの協力と尊重、3) 伝統的な知恵や地域の文化への尊敬をもって、4) コミュニティの利益を優先し、5) 透明で説明責任の果たせるプロセスを持ち、6) 短期的な損得ではなく、世代を超えた将来への投資という長期的な視点を持つことが大切です。

必要な要素) そうした取り組みを進める際に必要な要素があります。それは、1) 科学的根拠に基づく啓発・教育を行うこと、2) 楽しく、新しい取り組みに挑戦すること、3) 透明性高く、情報を開示すること、4) 各種データを広く深く収集・分析・評価することを含め徹底的な調査研究を継続・深化すること、5) 最新の技術を駆使すること (例えば、環境 DNA 分析など)、6) 関係者と協働で計画・管理 (co-design, co-manage) を進め協創 (co-produce) を目指すこと、7) 経済的な資源を担保するために、自然資本クレジットなどを通して、企業などの民間セクターの関与を

加速させること、8) 国際的な連携をもって取り組むことで、より良い成果につなげることができると思っています。

我々は、今回の Amamo2023 を通して、アマモ場を含む、ブルーカーボン生態系の保全・再生について、課題解明と合意形成の重要性を認識しました。具体的には、漁業者の覚悟、継続の力、持続的な市民の協働、行政によるガバナンス、企業のコミットメント、小学生の熱意、高校生の探求心、真実を見る目、若者への広がり、難しいけれども大切なことを伝えたいという想い、科学コミュニケーションなどの重要性を再認識しました。

今、我々自身が将来に向けて、上記に示した方針・配慮事項・必要な要素を共通のビジョンとして行動を起こすことが必要です。我々自身が活動するだけでなく、幅広い関係者への啓発・働きかけを通して、有効な社会環境ネットワークを構築し、環境の動的なシステムの理解を進め、環境の評価を行いながら順応的に社会変革のための行動を起こします。

Amamo2023 参加者一同

会場風景（1日目：基調講演・パネル討論）



会場全景



デュアルテ教授



ゴンザレス事務局長



桑江朝比呂理事長



渡邊敦上席研究員



パネル討論



司会：佐伯桃子さん



受付



会場風景



展示スペース

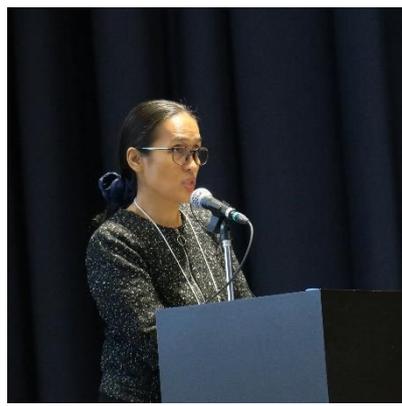
会場風景（2日目：基調講演・セッション1）



掘正和グループ長



近藤倫生教授



プリマベラ教授



アウグスティ教授



山崎氏 禧久氏 袈裟丸氏

川畑会長



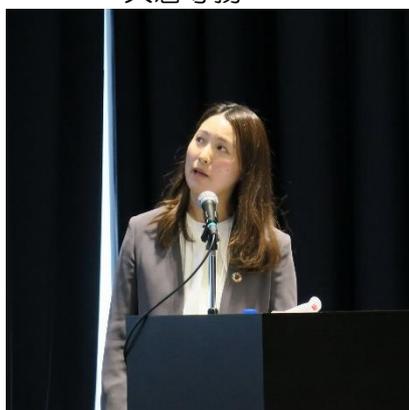
天倉専務



塩田代表



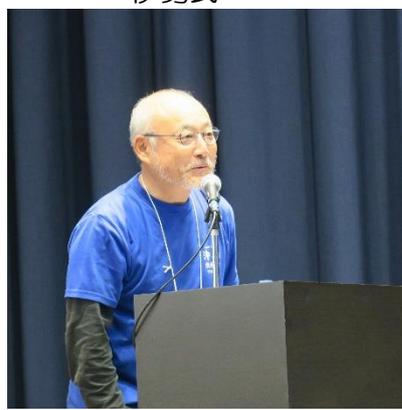
伊勢氏



志村氏



森永事務局長



竹内理事長

会場風景（2日目：セッション2・3）



阪南市立西鳥取小学校



岡山学芸館高等学校



城東高等学校



芦北高等学校



北陽高等学校



大神代表理事



柁助教



田村さん



瀬之上さん

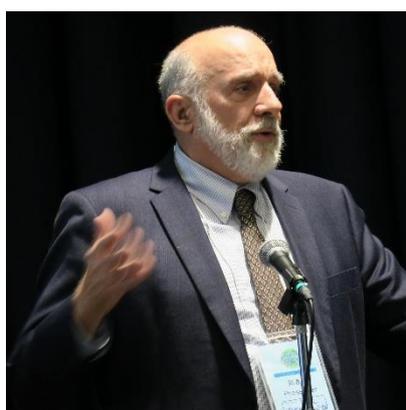


アンダーソンさん

会場風景（3日目：基調講演・セッション4・ワークショップ）



灘岡和夫教授



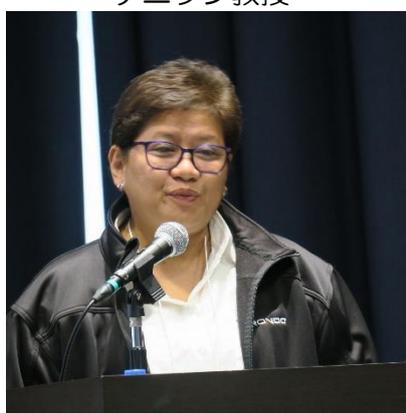
デニソン教授



ニウエン氏



クルーズ教授



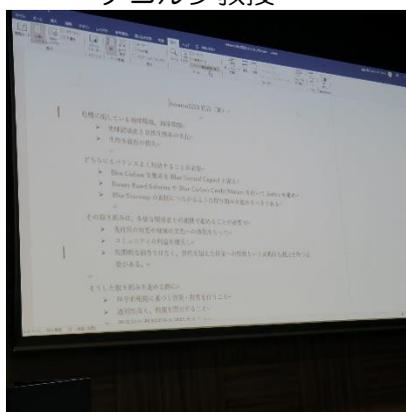
ナコルダ教授



タデシ氏



古川理事長



宣言文



林 元代表



ワークショップ風景

国際アマモ・ブルーカーボンワークショップの成果と今後の展望

海辺つくり研究会理事長・古川恵太

★キーワード：アマモ場再生、市民参画

「ブルーカーボン」という言葉を最近耳にすることが多くなってきた。様々な海洋・沿岸域の危機が迫る中、炭素の固定能力と生物多様性を涵養する力を持つブルーカーボン生態系の保全・再生は、地球温暖化の緩和策・適応策として、またネイチャーポジティブを実現するための取り組みとしても注目されている。2023年11月に、国際ワークショップが開催され、研究の最前線と、活動の現状、そして未来に向けたメッセージが共有された。

国際ワークショップ開催までの経緯 - ブルーカーボン生態系としてのアマモ場の再生

2023年11月17 - 19日、笹川平和財団国際会議場で国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ（Amamo2023）が開催された。会場とオンラインのハイブリッドで開催された会議では、国内外から、10の基調講演、パネル討論を含む5つのセッションでの23の発表があり、3日間を通して会場で延べ500人の参加、オンラインで延べ2,400人にご視聴いただいた。現在もSPFチャンネルで全てのプログラムが日・英2か国語で視聴可能である¹。

ブルーカーボンとは、海洋の生態系に取り込まれた炭素を示し、2009年の国連環境計画（UNEP）の報告書で命名された。そうした機能を持つ生態系としては、マングローブ林や海草場、藻場、干潟などが代表的である。アマモ（甘藻：*Zostera marina*）は、温帯から寒帯の浅い海に生える沈水性の海草であり、そのアマモが繁茂するアマモ場は、生き物のゆりかごと呼ばれ、アオリイカなどの産卵場所や、アミメハギやメバル、アナハゼなどの稚魚の生育場として貴重な場として認識されてきた。

実は、こうしたアマモ場の再生を目指して、2005年に第1回目となる国際ワークショップが横浜で開催された²。欧州や地中海のアマモ場の再生・保全に取り組む専門家から最新の再生技術や市民参画の様子が紹介されるとともに、国内でのNPO/NGOによる再生活動や大学・研究機関による学術研究の状況がポスター展示された。この国際ワークショップに触発され、日本における本格的なアマモ場をはじめとする海辺の自然の再生・保全活動の機運が高まり、2008年からは、国内での情報共有、再生活動をしている人々のネットワークづくりのために、全国アマモサミットが開催されていくことになったのである³。

今回のAmamo2023は、そうした国内の活動の進展を振り返るとともに、近年のブルーカーボンをめぐる研究や社会実装を概観し、今度は日本から世界やアジア地域に向かって海辺の自然再生のあり方を発信することを目指して開催されたものである。

¹ https://amamo2023.com/?page_id=2293

² https://www.spf.org/opri/newsletter/120_3.html

³ 全国アマモサミットは2023年の福岡大会をもって、その活動を一旦終了することとなった。

ブルーカーボン生態系 - 多様な価値を生み出す資産

第1日目には、世界の先端を行く研究者・地域機関の代表らによる基調講演とパネル討論が行われ、ブルーカーボン生態系を保全再生するための視点・考え方が示された。

キング・アブドラ科学技術大学のカルロス・デュアルテ特別教授は「ブルーカーボン生態系の保全に関する国際的・学術的潮流」と題して、多様なブルーカーボン生態系のもつ価値（共益）を説明し、地球温暖化への対応とともに、生物多様性の劣化を食い止めることをバランスよく実施する必要があること、ブルーカーボン生態系の価値を積極的に生み出す努力や海洋の自然資本（Blue Natural Capital）として投資するような社会変革を起こすことが必要だと説いた。

東アジア海域環境管理パートナーシップのエイミー・ゴンザレス事務局長は「東アジア海域におけるブルーカーボン事業の展開・展望」と題して、地域における行動を進めるために包摂的な社会への変革が必要であり、そのためには地域戦略や総合的な管理を実現するガバナンスが鍵となり、様々な立場の関係者が参画する包摂的な社会を構築することが大切であると指摘した。

ジャパンプルーエコノミー技術研究組合（JBE）理事長であり港湾空港技術研究所の沿岸環境領域長でもある桑江朝比呂氏は「ブルーカーボンの研究、政策、社会実装の動向」と題して、研究者としてブルーカーボン生態系における炭素固定メカニズムの解明の最前線を紹介するとともに、関係者との対話・協働、Jブルークレジットの認証による社会システムの構築の重要性を強調した。

笹川平和財団海洋政策研究所の渡邊敦上席研究員からは「ブルーカーボンを基軸としたブルーエコノミーへの展開」と題して、ブルーカーボン生態系の保全・再生から、その利益を享受する社会・経済環境としてのブルーエコノミーの構築への提言がなされた。例として、ケニアでのマングローブ林再生事業の利益がコミュニティに還元されている様子や、Jブルークレジットの認証・売買における多様な関係者の関与の実態などが示された。

基調講演者全員が参加したパネル討論では、水産研究・教育機構の堀正和氏がモデレートし、具体のブルーカーボン生態系の保全・再生事業を進めるためには、より多くの人への啓発が必要であり、海辺の自然を資産と考え、東アジア特有の海と人々の強い関係性を考慮し、コミュニティの利益や、将来への投資を考えることが必要であることが指摘された。また単なる自然再生活動にとどまらず、地域の文化も含めた再生につなげるためには、科学的根拠に基づく啓発・教育を行うこと、ブルーカーボンに関する情報を透明性高く開示すること、徹底的な調査研究を継続すること、最新の技術を駆使することが大切であり、そのための協働体制の構築を前提とした事業化が鍵となることなどが共有された。会場からは、ブルーカーボンに対する微生物の寄与、社会変革・コミュニティの参画、グレーインフラとの関係などに関する質問があった。

ブルーカーボン生態系の保全・再生、価値の創出は次の世代への責任としてのコミットメントであるとともに、若者たちのエンパワメントが求められている。

ブルーカーボン生態系の保全・再生の最前線

第2日目には、各国におけるブルーカーボン生態系の現状と研究活動に関する基調講演と共に、3つのセッションにおいて、具体的な取組みが紹介された。

水産研究・教育機構の堀正和沿岸生態系暖流域グループ長から「日本における藻場生態系のブルーカーボン定量評価の実践」と題して、世界の潮流に対する日本政府の関連政策を概観するとともに、水産庁における研究プロジェクト「ブルーカーボンの評価手法及び効率的藻場形成・拡大技術の開発」の成果に基づき、日本のブルーカーボン生態系の現状と炭素貯留量の推定結果を解説した。

東北大学大学院生命科学研究科の教授であり ANEMONE の主宰でもある近藤倫生教授は「ANEMONE－環境 DNA を利用した日本の生物多様性観測網」と題して、新たな国際目標である「ネイチャーポジティブ」の実現のために必要となる生態系の理解・回復手法としての環境 DNA の技術の適応例、全国ネットワークである ANEMONE の取り組み、海草藻場の生物多様性効果の測定例、多様な関係者の協働の可能性などを具体的に紹介した。

フィリピンのア克蘭州立大学のヤスミン・プリマベラ教授は「フィリピン中東部ペナイ島におけるブルーカーボン生態系の保全と機能的再生に向けた地域の取り組み」と題して、ペナイ島で実施されている 5 つのマングローブ林の保全・再生事業について解説した。各事業は、地域のコミュニティや大学、漁業関係者の協働により実施されており、ブルーカーボン生態系の保全・再生においては広範で複雑な生態系サービスの発揮とその支配要因に配慮し、多様な関係者を含む社会ネットワークの構築が必要であると締めくくられた。

キング・アブドラ科学技術大学海洋科学部のスーザン・アウグスティ教授は「気候変動への生物適応：紅海を例として」と題して、生物の温度に対する応答を議論の出発点として、地球温暖化の変化がどのように生物に影響するかについて解説した。温度・塩分が高く、貧栄養な紅海を世界の温度上昇を先取りした実験場としてとらえ、植物プランクトンや海草の観測・実験により、生物が熱適応していく可能性を示した。

会場からは、生物多様性の回復・再生の目標や対応策の選択についての質問があり、環境 DNA の研究からのアプローチの可能性が回答された。

セッション 1 では、実践の最前線 1（漁業者・企業・市民の関わり）として、漁業者、行政、企業、市民の多様な取り組みが紹介された。全国 JF 漁青連の会長である川畑友和氏は、日本の漁業者が実施している藻場の磯焼け対策の実際と成果を具体的に紹介し、ウニ駆除や囲い網の有効性を強調した。会場ではその代表である 3 名の漁業者・支援者が壇上に上がり、活動への意気込みを語った。日生漁業組合の天倉辰己氏は、38 年続けてきたアマモ場の再生事業の詳細とその展開を報告し、さらには海洋教育や地域のブランド化などにも言及した。金沢八景－東京湾アマモ場再生会議の塩田肇代表からは、横浜で市民活動として実施されてきた「ゆるやかな連携」によるアマモ場再生活動と関係する人々のつながりが紹介された。国土交通省の関東地方整備局の伊勢勉氏より、行政が主導する官民連携のアマモ場再生の枠組みである東京湾 UMI プロジェクトが紹介され、企業の参画を促した。マルハニチロ株式会社の志村遥夏氏は、グループ会社が取り組む環境活動や東京湾 UMI プロジェクトへの参画状況を紹介し、その中でアマモ場再生活動の取り組みが社内の環境教育や高校生への支援、企業の社会的責務への対応など多角的な意義を持っていることを強調し、企業・行政・学術団体・活動団体の連携の必要性を訴えた。セブン・イレブン記念財団の事務局長森永仁氏は、同財団が実施する日本の美しい自然を次世代に引き継ぐため

に実施している社会貢献活動について紹介し、募金の活用を通してセブンの森・セブンの海の森づくりなどを通して地域へ還元をはかっている様子が説明された。たてやま・海辺の鑑定団の竹内聖一氏は、館山市沖ノ島における磯焼け、アマモ場の減少を報告し、森と海の関係に着目したアマモ場再生活動について紹介し、関係者の連携による活動の継続を訴えた。

会場から、活動する人たちのモチベーションとインセンティブについての質問があり、豊かな海の持続・再生が重要であることがコメントされた。

セッション2では、実践の最前線2（市民・若者の関わり）として、小学生や高校生が自ら発見した課題を発表し、その解決への工夫・考えが示された。大阪の阪南市にある西鳥取小学校の13名の児童らはアマモ場の再生や海の生き物飼育で学んだことをスライドや劇で、「はんなんのうみ」として発表し、海の環境を守るために考え行動することを促した。その後、海辺の自然再生高校生サミットに参加した学校から選抜された4校の高校生による発表があった。岡山学芸館高等学校の平岩恋季さんはアマモの種を使った醤油醸造に挑戦し、アマモのさまざまな利用法を探った。福岡工業大学附属城東高等学校の学生たちは、地域の環境に合ったアマモの再生方法を開発し、熊本県立芦北高等学校の林業課の学生たちは地元漁師の依頼で森と海のつながりを意識したアマモ場の再生を長年続けてきている。関西大学北陽高等学校では、海の学びから自分たちのできることを探し、「海は繋がっている～海は、みんなのもん～」という言葉にのせて実践している。発表を通して、海、そしてアマモ場の大切さを知ることができたこと、それをみんなに広め、自らできることを見つけ、試行錯誤しながら取り組むことの大切さが伝えられた。

セッション3では、実践の最前線3（科学コミュニケーション）として、見ることの大切さ、興味を持ってもらうための努力などが、サイエンス・コミュニケーションの視点から発表された。現役のアナウンサーであり、大学でサイエンス・コミュニケーションを研究している榎太一モデレーターが「ブルーカーボン」の認知についての研究成果を発表してディスカッションをリードし、福岡 FUN の大神弘太郎氏が水中映像を使って福岡の海のすばらしさ・可能性を伝え、連携の重要性を強調した。東京湾連絡網という大学生ネットワークを主宰する田村聖花さんは、東京湾の保全・再生に関わる活動を行う市民団体と大学生をつなぐ役割を、SNSを通じた情報発信で実践し、環境活動に参加する若者を増やすことの重要性を訴えてた。その過程で、初心者素朴な疑問に丁寧に答えることの大切さを実感し、独自のワークショップや教材づくりに挑戦している。小学校3年生の瀬之上綾音さんは、ブルーカーボンを知ったときの難しさと、同世代に届けることの大切さを実感し、インフォグラフィックスや一枚の紙を折って作る絵本作りに挑戦した。発表の最後に、「難しいからといって、子どもたちに情報を伝えないことが無いようにしてほしい」と訴えた。最後にメリーランド大学環境科学センターのサイエンス・コミュニケーターであるシドニー・アンダーソン氏が国際共同研究 COAST Card で実施されているサイエンス・コミュニケーションの実際を解説した。発表者同士のディスカッションの中で、コミュニケーションツールとしての映像や絵本などの可能性、若い世代の海への興味の持ち方、情報の伝え方の工夫について意見交換がなされた。科学的成果に基づき、世代や専門性を超え、開かれたコミュニケーションをしていくことの大切さが確認された。

こうしたセッションを通して、活動する人たちの覚悟や社会的仕組みの整備、若者や子供たちが自らできることを見つけ試行錯誤しながら取り組む様子、コミュニケーションツールとしての映像や絵本などの可能性、若い世代の海への興味の持ち方、情報の伝え方の工夫の大切さが確認された。

市民参加型の社会変革に向けて

最終日には、ベルモントフォーラムの国際共同研究である COAST Card プロジェクトを中心とする市民参画による社会変革を目指す方向性について、2名の基調講演、5名の共同研究者からの発表が行われるとともに、Amamo2023 の成果文書となる宣言文が議論された。

東京工業大学名誉教授であり、COAST Card プロジェクトの日本代表である灘岡和夫氏より、「熱帯・亜熱帯沿岸生態系の保全戦略」として、グリーンカーボン（陸域）生態系とブルーカーボン（海域）生態系を総体として認識すべきであるという G-B リンクの考え方や、様々な関係者のネットワークをつなぐメタ・ネットワークの必要性を提言した。

メリーランド大学環境科学センターのセンター長で COAST Card プロジェクトの国際コンソーシアム代表のウィリアム（ビル）・デニソン教授は、米国・チェサピーク湾での Report Card による総合評価の事例を紹介し、包摂的社会の構築のために、啓発から、協働、そして共創へと発展する関係者の関与を推進することが必要であり、関係者をつなぐファシリテータの役割の重要性であると強調した。

セッション4として、実践の最善性4（各国での実践）が開催され、セッションのモデレータである東京海洋大学の川辺みどり教授から COAST Card プロジェクトの紹介の後、COAST Card プロジェクトメンバーより、米国、フィリピン、ノルウェー、日本でのプロジェクトを通じた取り組みが紹介された。メリーランド大学環境科学センターのヴァネッサ・ニューエン博士は、米国チェサピーク湾における適用事例を紹介し、社会ネットワーク解析に基づき関係者の関与のあり方について分析した。フィリピン国立科学技術学術院のルーデス・クルーズ教授は、ルソン島中部で再発、持続かつ悪化する洪水の問題について関係者間の認識醸成、対策検討のためのツリー分析の事例を紹介した。フィリピン大学ロスバニョス校のヒルディ・ニコルダ博士は、西フィリピン海沖の遠隔地パグアサ島における保護・保全管理計画の策定における、地元の生態学的知識と海草の社会生態学的システムの重要性を指摘した。ベルゲン大学のアクリル・タデシ博士は、プロジェクトで採用されている環境の連関を解析するシステム・ダイナミクス・モデルについて、ポトマック川における栄養塩循環と農業・畜産の影響の解析を例に紹介した。最後に海辺つくり研究会の古川恵太理事長が、東京湾の環境変遷、再生行動計画などを説明し、COAST Card プロジェクトで実施された江戸前勉強会の成果・今後の展望について紹介した。

環境管理のロールプレイング

第3日目の午後には、会場みのプログラムとして、環境の管理への参画を疑似体験するロールプレイング・ゲームが実施された。このゲームは、メリーランド大学の環境科学研究所と WWF がエマーソン大学のエンゲージメント・ラボの協力を得て作成したゲームで、今回のワーキング

ップのために、日本語訳が追記されたカードが準備された。高校生から一般の参加者、発表者が丸テーブルに分かれ環境管理の難しさ、それが環境の評価に反映されていくプロセスを楽しく体験し、包摂的な社会（Inclusive Society）のあり方、考え方などを学習した。そして、最後、COAST Card プロジェクトのビル・デニソン研究代表から締めくくりの挨拶があり、3日間のプログラムを全て終えた。

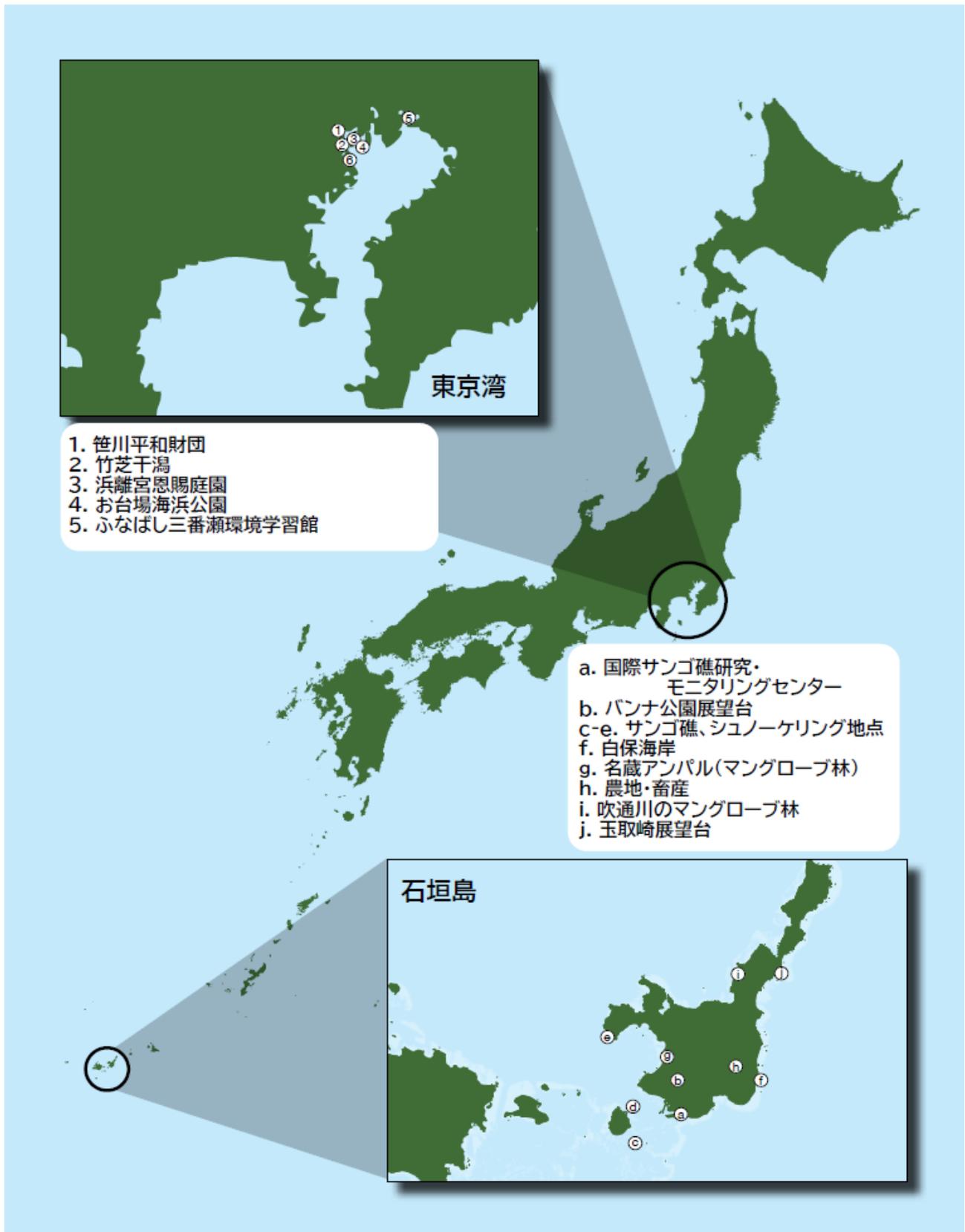
私たちは、この3日間でブルーカーボンという新たな言葉・概念に深く接し、それが我々の社会の持続性に深くかかわっていることを実感するとともに、多くの若者、子どもたちが自ら取り組んでいる様子とメッセージを受け、アマモ・ブルーカーボン生態系の再生を里海づくりとして多様な関係者と共に続けていくための行動を起こす誓いを立てることができた。



1日目、2日目の発表の様子（左上から時計回りに：基調講演をするカルロス・デュアルテ教授、セッション1での漁業者の決意表明、セッション2の阪南市立西鳥取小学校の発表、セッション3のパネル討論

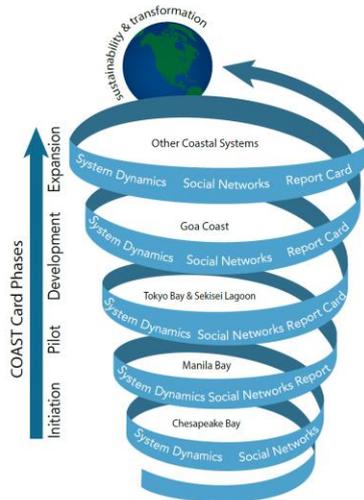


3日目の参加型ワークショッププログラムの様子、メリーランド大とWWFが作成した環境の管理への参画を疑似体験するロールプレイング・ゲーム（Get the Grade）を行った。



第2世代のレポートカード

持続可能な社会の実現と社会変革のための沿岸海洋の評価(COASTカード)は、ベルモントフォーラムが資金を提供する国際的かつ学際的なプログラムで、地球規模の持続可能性の課題に対する解決策を育むことを目的としています。社会・生態学的ネットワーク分析(SNA)、社会・環境状況レポートカード(RC)、システム・ダイナミクス・モデル(SDM)という3つのツールを統合した新世代のレポートカード(評価システム)です。これは、チェサピーク湾流域で普及しているレポートカードの枠組みをベースにしており、日本の東京湾や石垣・石西礁湖、フィリピンのマニラ湾、インドのゴア海岸で適用されています。適切な人々(SNA)、一般に入手可能な統合された情報(RC)、そして堅牢なモデル(SDM)を組み合わせることで、積極的な社会環境変化を引き起こすために何が必要かの指針を得ることができるのです。



謝辞

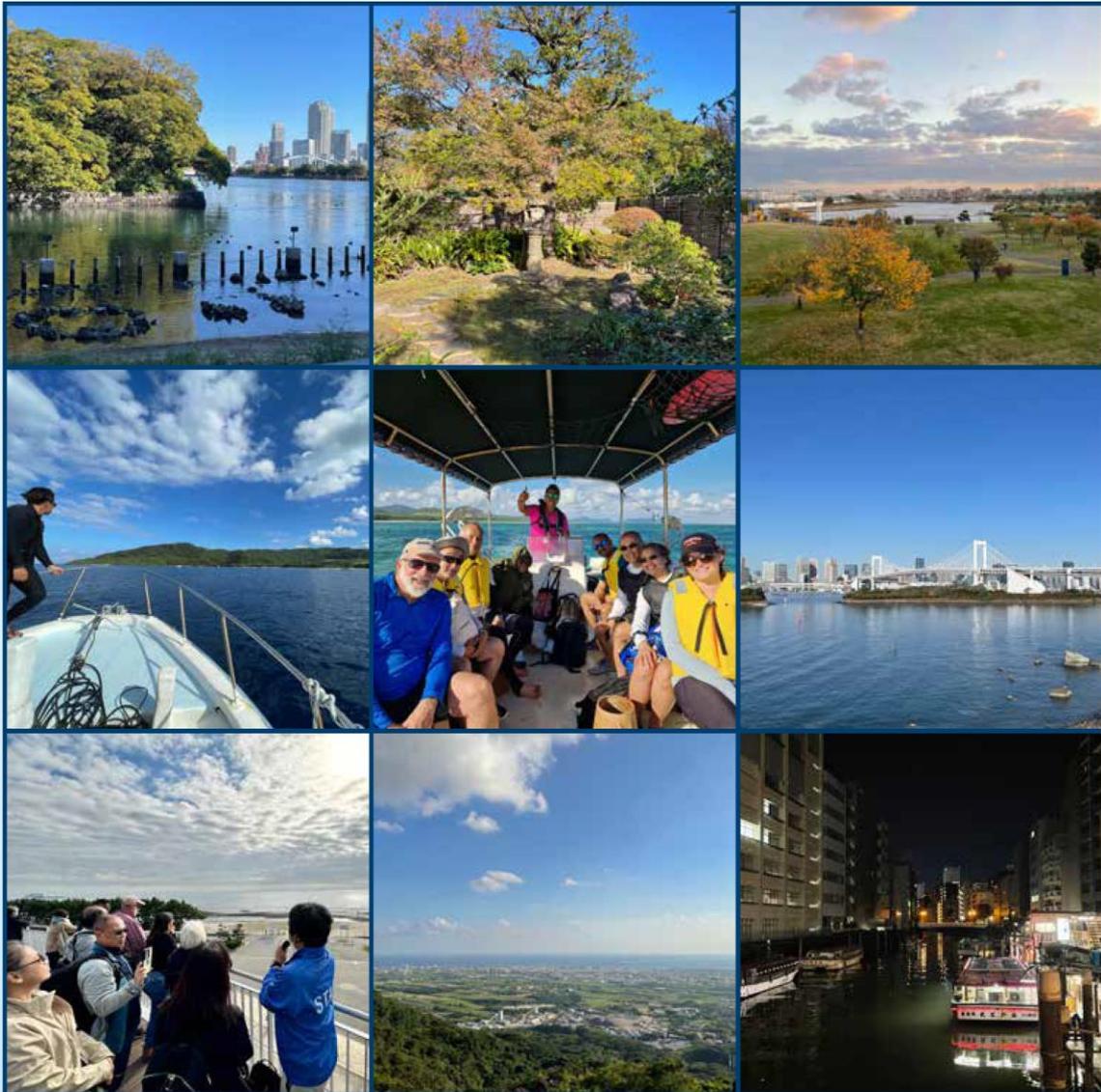
mamo2023の開催にあたり、プロジェクトの出資者である科学技術振興機構、ご協賛いただいたセブン-イレブン記念財団、日本テレビ放送網株式会社、東京海上日動火災保険株式会社、公益財団法人東京水産振興財団、国際エメックスセンター、株式会社Macs、特定非営利活動法人海辺つくり研究会の皆さまに感謝いたします。また共催の公益財団法人笹川平和財団海洋政策研究所にもお礼申し上げます。会議においては、ファシリテーター、プレゼンターの皆様、司会をしていただいた佐伯桃子さま、現場でオンラインでご参加いただきました皆さま、ありがとうございました。また、東京湾での見学会においては、東京都港湾局の和田文典さま、安藤彰さま、郷原圭介さま、ふなばし三番瀬環境学習館の小澤鷹弥さま、大森 海苔のふるさと館の小山文大さま、竹芝タウンデザインの星川和也氏の他、谷本理恵子さま、向井梨沙さまにお世話になりました。ここに記して改めてお礼申し上げます。



University of Maryland
CENTER FOR ENVIRONMENTAL SCIENCE
INTEGRATION AND APPLICATION NETWORK

表紙画像 竹芝干潟(左上)、浜離宮恩賜庭園(中央上)、大森 海苔のふるさと館からのふるさとの浜辺公園(右上)、石西礁湖でのシュノーケリング(左中)、石垣島海上視察(中央中)、お台場海浜公園(左中)、ふなばし三番瀬環境学習館展望台からの三番瀬(左下)、パンナ公園展望台からの石垣島(中央下)、東京湾屋形船(右下)。

Amamo2023およびJ-COASTの開催



ブルーカーボン研究の進展

11月17日～19日に東京都港区の笹川平和財団国際会議場ならびに、オンラインで開催された「国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ2023(Amamo2023)」及び11月19日～21日に同会議場及び関連会場で開催された「国際COASTカードワークショップ(J-COAST)」が盛況のうちに終了しましたことを心より御礼申し上げます。



パネルディスカッションに参加する基調講演者(左)、ポスターとCOASTカードの資料展示(中央)、控室での昼食休憩(右)

最初の3日間は国際会議場でAmamo2023ワークショップが開催され、基調講演、口頭発表セッションや参加型ワークショップが行われました。基調講演は9件あり、アブドラ王立科学技術大学(KAUST)のカルロス・ドゥアルテ教授は「ブルーカーボン生態系を保全する国際的・学術的動向」について、メリーランド大学環境科学センターのウィリアム・デニソン教授は「COASTカードの概要:持続可能な沿岸地域づくりのための社会変革」について講演しました。



小学3年生の瀬之上綾音さんがデザインしたアマモ2023のロゴ

Amamo2023の口頭発表セッションに加えて、参加者は参加型ワークショップに参加し、「Get the Grade Game」という環境問題に関係する人々の役割を疑似体験するロールプレイングゲームを実施しました。このゲームは日本語に翻訳されており、高校生から大人までが一緒にテーブルでプレイすることができ、優勝テーブルには賞品が用意されていたため、国内外からの参加者は、生態系を健全なものにし、最高グレードを獲得しようと懸命に取り組んでいました。



参加者は「Get the Grade game」ゲームをプレイ



COAST カードチームによる東京湾探訪

COASTカードチームは東京湾を探訪しました。最初に、様々な市民参加イベントが開催される竹芝干潟(2)を訪れました。そこでは、竹芝干潟の歴史を管理者である竹芝タウンデザイン星川誌が、水質観測やプランクトン観測のことをCOASTカードチームのメンバーでもある古川氏が説明しました。



水質調査のデモンストレーションを見学(左)、2024年の目標を議論するCOASTカードチーム(中央)、浜離宮恩賜庭園の樹齢300年の松(右)

その後、COASTカードチームは数時間かけて、このワークショップの成果のとりまとめや、COASTカード・プロジェクトの最終成果について議論を行いました。浜離宮恩賜庭園(3)では、伝統的な日本家屋に車座になり、自分たちが学んだこと、このプロジェクトがもたらす影響について話し合いました。その後、庭園内にある伝統的な茶室を訪れ、お抹茶とお菓子をいただき、庭を散策し、日本で最古の造成湿地を堪能しました。

東京湾探訪の最終日、COASTカードのメンバーと関係者はお台場海浜公園(4)を訪れ、公園の歴史や整備について、東京都港湾局の方々からの説明を受けて学びました。また、心なばし三番瀬環境学習館(5)を訪れ、多様で充実した学習ツアーを体験しました。同学習館は、体験型のデジタルゲームやシミュレーションを通じて、環境科学の教育、体験活動、楽しさをテーマとして取り組んでいるユニークな施設でした。さらに、メンバーは大森海苔のふるさと館(6)で、東京湾で古くから栽培されている海苔について学びました。館内には、実物大の海苔の作業船や歴史的な籠、海苔養殖の発展を象徴する道具などが展示されていました。一行は啓発され、お腹を空かせて東京湾探訪を終えたのでした！



心なばし三番瀬環境学習館見学(左上)、お台場について学ぶ(右上)。お台場海浜公園からの眺め(左下)、大森海苔資料館を見学(右下)



石垣・石西礁湖のサンゴ礁とマングローブ林の保全

11月22日、COASTカードチームは石垣島・石西礁湖での2日半の現地見学のため東京を出発しました。環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター(a)に到着後、チームは環境省の山本博士とCOASTカードチームの日本代表である灘岡教授から説明を受けました。山本博士は、石垣島と西表島の間に広がる日本最大のサンゴ礁である石西礁湖について、同センターと石西礁湖自然再生協議会による保全・再生への取り組みについて説明してくれました。その後、チームはバナナ公園展望台(b)に行き、石垣島と八重山諸島の素晴らしい眺めを堪能したのです。



CARDチームは石垣島・石西礁湖を訪れ、ラグーンのあちこちでシュノーケリングをしてサンゴ礁の状態を観察しました

COASTカードチームは、石西礁湖でシュノーケリングを行い、サンゴの回復が遅く、死サンゴの瓦礫が多い場所(c)、もうひとつはサンゴの被度が比較的良好な場所(d)、さらにシュノーケリングやダイビングによく利用される大崎海岸の近く(e)の様子を直接観察しました。その後、白保サンゴ村(f)を訪れ、等々力流域の人間活動がサンゴに与える影響について勉強し、観察しました。



トビハゼはマングローブの木の根の間に生息する、皮膚呼吸ができるアイドル的な魚です

最終日、チームはナグラ・アンパルのマングローブ林(g)を短期間訪れた後、内陸部に移動し、地元の畜産課の担当者(大久氏)と会って現在の農業や家畜のやり方について学びました(h)。赤土の流出はサンゴ礁にとって大きな脅威であり、水質の悪化は回復を妨げ、サンゴ礁の健全性を低下させていることが説明されました。農地からの侵食土の流出を防ぐグリーンベルトや、侵食土が海に流れ込む前に受け止める沈砂池など、さまざまな流出防止方法の普及に努めている様子を見学しました。

チームは、肉牛を飼育している地元の畜産農家に会いました。彼は牛の排泄物を農地の肥料として利用し、サンゴに悪影響を与える可能性のある周辺環境への栄養分の流出を減らしています。干潮時に吹通川のマングローブ林(i)を探検し、マングローブの根の間を飛び回るトビハゼ(空気を直接呼吸できるハゼ科の魚)を見つけました。最後に、チームは玉取崎展望台(j)に行き、石垣島沿岸の裾礁の形態的特徴を広く観察しました。



COASTカード・チームと地元の畜産課担当者、畜産農家





おかげさまで設立30周年 ご支援ありがとうございます。

セブン・イレブン記念財団は、2023年11月20日をもって設立30周年を迎えます。これもひとえにお客様、日本全国の環境市民団体の皆様、セブン・イレブン加盟店の皆様方の温かいご支援と激励の賜でございます。ここに心よりの感謝を申し上げます。



セブン・イレブン記念財団は、店頭でお客様からお預かりした募金と企業、団体、個人の皆様からの寄付金をもとに、“環境”をテーマにした社会貢献活動に取り組むことを目的に4つの事業領域を設け、活動しています。

一般財団法人 セブン・イレブン記念財団の事業



セブン・イレブン記念財団は、これからも地域に根差した社会貢献活動に取り組んでまいります。



1953年の8月28日、
日本初の民間放送のテレビ局として私たちは誕生しました。

当時の日本にテレビがある家はとても少なく、
屋外の街頭テレビから流れるプロレス中継が人々を夢中にしていました。
その街頭テレビの設置を、放送開始に先立って進めたのは日本テレビです。

まだ誰も見たことのない感動を届けたい。
プロ野球中継も、箱根駅伝も、24時間テレビも、リアルタイム配信も、
その強くて熱い意志から生まれ、やがて日常の風景になりました。

誕生したばかりの頃は白と黒の色しかなかったテレビが、
やがて色とりどりのカラー放送になったように。
今を生きる多彩な一人ひとりの、まだ見たことのない歓びへ。

時代の変化を超え、人々の想像も超えて
日本テレビは未来のための進化を、この先もずっと続けていきます。

この70年を超える。超え続ける。


NIPPON TV
70th ANNIVERSARY



マングローブの森づくり。 それは、豊かな地球を未来に届けること。

東京海上日動が、1999年から続けているマングローブの森づくり。
小さな苗木は大きな森に育ち、多くの二酸化炭素を蓄えるようになりました。
様々な生き物を育み、豊かな恵みをもたらし、
人々の暮らしを守る役割も果たしています。

そして今も、私たちは、その森をつくり続けています。
マングローブ植林は「地球の未来にかける保険」です。

これからも、ともに未来へ。

マングローブ価値共創 100年宣言



東京海上日動

www.tokiomarine-nichido.co.jp

To Be a Good Company



一般財団法人

東京水産振興会



公益財団法人 国際エメックスセンター

International EMECS Center



特定非営利活動法人

海辺つくり研究会



株式会社 MACS

全国アマモサミットの歴史

History of National Amamo Summit

横浜 国際ワークショップ
東京湾の生態系の再生をめざして
 Tokaiwan International Workshop for the Revival of the Tokyo Bay Ecosystems
 おおぞろろアマモサミット 横浜から発信するトウモロコシ・イモ・パン
 2005.11.25(金)～27(日)

参加費無料
 (日本語同時通訳つき)

2005年11月25日(金)～27日(日)の3日間、横浜国際ワークショップ「東京湾の生態系の再生をめざして」が横浜で開催されました。このワークショップは、東京湾の生態系の再生をめざして、横浜から発信するトウモロコシ・イモ・パンをテーマに、国内外から参加者が集まり、情報交換を行いました。このワークショップは、東京湾の生態系の再生をめざして、横浜から発信するトウモロコシ・イモ・パンをテーマに、国内外から参加者が集まり、情報交換を行いました。

2005年 全国アマモサミットのきっかけとなった 国際ワークショップ

2005年の11月、これからの日本の沿岸生態系の保全や再生のあり方を問う、横浜国際ワークショップ「東京湾の生態系の再生をめざして よみがえるかアマモ? 横浜から発信するトウモロコシ・イモ・パン」が開催されました。アマモ場の再生のために、統合的な沿岸域管理が必要なこと、そして多様な関係者の協働が不可欠であることを学んだ私たちは、日本の沿岸域生態系の保全・再生を促進するための方策を模索し始めることとなりました。数年かけて議論を進め、2008年から年に1回、情報の共有、各地での保全・再生事業の推進、より多くの関係者とのネットワークの構築を目指して、「全国アマモサミット」を開催することとなりました。その後、コロナ禍の影響により2020年の中断(1年間)があったものの、2023年10月の福岡大会まで15回のサミットが開催されました。この第15回をもって「全国アマモサミット」は区切りをつけることとなりました。そして、2023年11月に国際アマモ・ブルーカーボンワークショップを東京で開催し、この18年におよぶ足跡を振り返り、今、私たちがなすべきことを宣言としてまとめました。

全国アマモサミットで出された 宣言の概要

とし	ばしょ	ないうち
2008	横浜	「みんなの力でアマモ場を再生し、子供たちに残そう豊かな海」 ・みんなで、まちおこし、多くの仲間、共通の目標、子どもたち
2015	熊本	「八代海・有明海を豊かな海に再生するための 持続可能な取組みの実現」 ・調味、連携、場の設置、趣向的、防災との両立、実現のための配慮
2016	備前	「備前川 豊海、里山アラウンド」の確立 ・若者の育成、文化を継承、人のつながり(よーまー、オセ)
2017	伊勢志摩	「未来に輝け!! とこわか海」 ・機会、出会い、学校、漁業者、研究者、行政、皆で考え連携
2018	阪南	「5つのヒト、50,000の家族」 ・豊かさや愛の「守り隊」、大人と子ども、食べる文化、研究者と行政
2019	みやぎ	「やるっちゃアマモの森つり 豊かな海を守るっちゃ」 ・大切さを伝え、未来へ繋げる、子どもたち、若者、生き物、機会の提供
2021	あおもり	「高めよう陸奥湾の魅力」 ・次世代への継承、魅力の発信、新たな取組み
2022	たてやま	「豊かに自然環境を未来へ～南房総・館山から世界へ～」 ・世界に向けた情報発信、全国から学び、地域で行動、一人一人ができること

2008年 第1回目の全国アマモサミット開催趣旨

いままでは数年にわたり、アマモ場の再生活動についてわれわれなりに学んできたのですが、このような集まりを繰り返していく中で、日本全国でアマモ場の再生活動が行われていることを認識しました。いままでは、私たちはアマモ場再生の重要性とその活動の内容とを横浜の地から発信してきましたが、このような課題・問題点の集約は、少なくとも日本国内においては、横浜だけで行うべきではなく、日本国内のいろいろな地域で情報交換の機会を持ち、それぞれの地域から、それぞれの地域の事情に合わせた活動内容を発信していただくことが大変重要であることを確信するに至りました。

このようなことから、2006年には「アマモサミットプレワークショップ」を開催して、日本各地で進められている沿岸域の自然再生・保全活動の様相について情報交換をしました。今年はこの準備期間に引き続いて、第一回の全国アマモサミットを横浜で開催させていただきます。(中略)

アマモ場の再生をキーワードとした沿岸域の自然再生が全国のいろいろな地域で行われていることが、今回のアマモサミットで浮き彫りになるとは思いますが、同時に、それぞれの活動が極めて地域性に富んだものであることも明らかになることと思います。(中略) それぞれの地域での行動・活動をどのように進めていくのが良いかというのを考えるのに大変参考になると思います。また、一つの地域内の小学生、社会人、年金生活者等の異なる世代がそれぞれの特性を發揮できるようにする方策は何か、という課題もあります。このことから、今回の集まりの主題を「地域連携・世代連携を探る」と言うことにしました。

アマモサミットの開催は、その資金的な裏付けが極めて厳しいものなのですが、運営に携わる皆さんのボランティア精神で何とか実施することができました。また、全国にお声を掛け集まっていた方には、主催者側から何らの経済的支援もできていないのが現状です。大変恐縮に感じておりますし、同時に感謝しております。

今回の集まりの中で、皆さんの間で活発な意見交換・情報交換が進められることを期待しています。

全国アマモサミット2008 実行委員会 委員長 林しん治

全国アマモサミット2008
 海辺の自然再生に向けた地域連携・世代連携を探る

12月5日(土)～7日(月)

12.5 横浜国際ワークショップ
 12.6 備前川 豊海、里山アラウンド
 12.7 伊勢志摩 未来に輝け!! とこわか海

2009-2023年 各地で開催された全国アマモサミット

2023年 再び国際ワークショップ

2023年11月17-19日、東京にて、再び国際ワークショップが開催されました。今回は「国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ (Amamo2023)」と題し、今までの全国アマモサミットの総括とともに、今後5年から10年の間に喫緊に取り組むべきことが議論され、Amamo2023宣言としてとりまとめられました。

Amamo2023宣言

2023年11月17-19日、アマモ場を含む、ブルーカーボン生態系の保全、再生のために活動する多様な関係者が、国内、国外から東京に集まり情報交換を行いました。その中で、ブルーカーボン生態系の保全、再生のための指針や方針、具体的な活動の情報交換がなされ、今後の社会変革に向けた取り組みが議論されました。

その結果として、我々の地理環境、海洋環境は地球温暖化による気候変動と、自然生態系の劣化の影響による生物多様性の損失の危機に直面しており、今、行動を起こす必要があります。我々は、以下のような行動の指針に基づき、自分たちができる最善を尽くして行動していくことを宣言します。

対地方針 気候変動と生物多様性の損失のどちらにもバランスよく対応することが必要です。そのためには、1) 科学的調査、知能をベースに、多面的な取り組みを行うことにより、ブルーカーボン生態系をブルー自然資産 (Blue Natural Capital) と捉え、2) 自然に配慮した対応 (Nature Based Solution) やブルーカーボン・クレジットやマーケットを用いて行動を進め、3) ブルー・エコノミーの進展につながるような取り組みを進めるべきです。

配慮事項 その取り組みは、多様な関係者との連携を進める必要があります。その際に、1) SDGやパリ協定、昆明-モントリオール宣言、ラムサール条約に示される地産地消可能な利用のような国際的 (Global) な目標や行動規範と地域 (Local) の価値創造の整合性を意識し、2) すべてのステークホルダーの協力を尊重、3) 伝統的な知恵や地域の文化への敬意をもって、4) コミュニティの利益を優先し、5) 透明な説明責任の果たせるプロセスを持ち、6) 短期的な損得ではなく、世代を超えた将来への投資という長期的な視点を持つ必要があります。

必要要素) そうした取り組みを進める際には必要要素があります。それは、1) 科学的根拠に基づく啓発・教育を行うこと、2) 産し、新しい取り組みに挑戦すること、3) 透明性高く、情報を開示すること、4) 各関係者を広く収容・分析・評価することを目的とした研究を継続・深化すること、5) 最新の技術を開発すること (例えば、環境DNA分析など)、6) 関係者と協働計画・管理 (co-design, co-manage) を実施すること、7) 経済的資源を確保するために、今後資本クレジットなどを進め、企業などの民間セクターの関与を加速させること、8) 国際的な連携をもつて取り組むこと、9) 若い世代に力を与えることなどができると信じています。

我々は、今回のAmamo2023を通して、アマモ場を含む、ブルーカーボン生態系の保全、再生について、課題認識と合意形成の重要性を認識しました。具体的には、漁業者の現状、継続的、持続的な市民の積極的、行政によるガバナンス、企業のミットメント、小生の熱意、高校生の探求心、真実を見ようとする者への広がり、新しい行政と民間との協働などについて、科学コミュニティの重要性を認識しました。

今、我々自身が将来に向けて、上記に示した方針・配慮事項・必要要素を共通のビジョンとして行動を起こす必要があります。我々自身が活動するだけでなく、幅広い関係者への啓発・働きかけを通じて、有効な社会連携ネットワークを構築し、環境的・社会的なシステムを理解を進め、環境の移行を行わなければならない社会変革のための行動を起こします。

Amamo2023参加者一同

2023年11月17日(金)18日(土)19日(日)
 November 17th, 18th, 19th, 2023
菅川平和財団 国際会議場
 International Conference Hall,
 The Sasakiwa Peace Foundation

国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ
 International Eelgrass and Blue Carbon Workshop

Amamo2023
 with J-COAST

主催: 国際アマモ・ブルーカーボンワークショップ実行委員会 (海辺つくり研究会、金丸八景一東京湾アマモ場再生会議、共有の森ネットワーク、ジャパンブルーエコノミー技術研究会、セアソール・ジャパン協会、菅川平和財団国際海洋政策研究所)
 Sponsorship: International Eelgrass and Blue Carbon Workshop Organizing Committee (Association for Shore Environment Creation, Amamo River Collaboration in Kanazawa-Hakke, Tokyo Bay Area, Network for Coexistence with Nature, Japan Sea Economy Association, Seven-Eleven Foundation, Ocean Policy Research Institute of the Sasakiwa Peace Foundation)

ご協賛
 企業・団体
 Sponsorship
 Companies
 Organizations

全国アマモサミット2023 in ふくおか宣言

私たちは、人の営みと自然環境の調和を真剣に考え、持続的に恵みを受けられることのできる「ふくおかの海」に想いを馳せて、それぞれの大切なものを尊重し、ともに行動します。

福岡・博多のまちには、大空との玄関口として物流・人流の面で日本と世界を結ぶ拠点として重要な役割を担っており、博多湾の豊かな自然を享受してきてきました。一方で磯焼け、漁業資源の減少、海底環境の悪化などの課題を抱えており、これらの課題解決に向けて多くの取り組みが行われています。

「全国アマモサミット2023 in ふくおか」では、「福岡の海に開く全ての関係者が福岡の海づくりの新たなスタートラインに立つこと」をテーマに、様々な立場の人が集まりました。大会を作り上げていく過程や大会中の議論を通して、私たちが皆「より良い博多湾」を求めており、SDGの次のステップである持続可能な豊かさの指標である「新国富指標」をみずして、「ふくおかの海」から得られる自然の価値を示す「自然資本」を高めることに努め、未来のより良い博多湾の実現に努める必要があることを再認識しました。本大会を通して私たちは、ともに活動していく基盤を築き、これらの新しい指標の向上のために新たなスタートラインに立ちたいです。

本大会の成果として、ふくおかの海から生まれた繋がりをもち、すべての関係者が豊かに幸せになるための「ウェルビーイング」向上のために、多様な人々とともに行動します。

全国アマモサミット2023 in ふくおか 実行委員会
 全国アマモサミット2023 in ふくおか 参加者一同

<http://amamo2023.com>

事務局：海辺つくり研究会・株式会社MAcS

Secretariat: Association for Sea Environment Creation & MA c S Lt.d